

ビーだま

ビーだまのように、キラリと光る一冊を

2017年1月～12月に発行された本の中から、とくにおすすめの本を紹介します

<編集・発行> 富山市立図書館 富山市西町5番1号
電話 076-461-3200

平成30年4月23日発行(年1回発行)

理科準備室のヴィーナス

戸森しるこ／著 講談社

理科の授業中、瞳はいつも人見先生を見つめてしまう。絵画のヴィーナスに似た顔立ちもシングルマザーという噂も気になって仕方がない。そしてクラスには、先生に視線を送る人物がもう一人いた。正木君だ。いつしか三人は、放課後の理科準備室で雑談をして過ごすようになる。

しかし、その心地よい関係は、正木君が起こした事件で終わった。人見先生の子どもを誘拐しようとしたのだ。



100時間の夜

アンナ・ウォルツ／作 野坂悦子／訳 フレーベル館



オランダに住むエミリアは、父のスキャンダルに嫌気がさし一人で飛行機に乗ってニューヨークに家出した。

ところがインターネットで予約した貸し部屋には、すでにセオとアビーの兄妹が住んでいた。巨大ハリケーンが迫る中、エミリアは無理やり部屋に転がりこむ。そこへ近所に住むジムも加わった。4人は町全体が停電した100時間を過ごすうち、お互いが抱える傷を打ち明けあう。

カーネーション

いとうみく／作 酒井駒子／画 くもん出版



妹がどんなに我儘^{わがまま}を言っても母は優しく甘やかす。けれど姉の日和^{ひより}には、目も合わせず何をしていても責めるだけ。日和はそんな母の機嫌を損ねないよう息を殺して生活している。

どうしたら母に好きになってもらえるのだろう……。一人悩む日和が唯一安らげる場所は、幼なじみの桃吾^{とうご}がいる塾だけだった。その一方で、母の愛子もまた、長女をどうしても愛せない自分に罪悪感を感じていた。

緑の霧

キャサリン・ヴァン・クリーヴ／作 三辺律子／訳 ほるぷ出版

ポリーの家は大農園で、観光客も多く訪れる。野菜の中でもチョコレートの味がする不思議なルバーブが人気だ。ところが敷地内に〈緑の霧〉が発生してから歯車が狂い始める。

農園のアトラクションにルバーブの根^{から}が絡まり大惨事になりかけたり、雨が全く降らず売り物の植物が枯れ始めたり。ルバーブや虫たちと話ができるポリーは、原因を探ろうとするうちに、意外な人物にたどりつく。



3つ数えて走りだせ

エリック・ペッサン／著 平岡敦／訳 あすなろ書房



移民であるトニーの家に、国から退去命令が届いた。フランスで生まれたトニーにとって、両親の故郷ウクライナは遠く見知らぬ国だし、両親も向こうには仕事がない。

ある朝、学校へ向かっていたトニーと親友は、どちらからともなく突然走り出した。行き先も決めず、何も持たず、なぜ走るのかも考えずに。一週間走り続けた二人はマスコミに取り上げられ、移民問題を考えるシンボルにさえなる。

オオカミを森へ

キャサリン・ランデル／作 ジェルレヴ・オンビーコ／画 原田勝／訳 小峰書店



帝政末期のロシアに、貴族が捨てたペットの狼を野生に返す母娘がいた。だが母は、皇帝に逆らったという無実の罪で逮捕される。娘のフェオは、脱走兵の少年とともに3匹の狼を連れ、追っ手から逃れた。

道中、帝国陸軍の横暴を憎む村人の助けを得て、サンクトペテルブルクを目指す。母を奪い返すため、フェオと狼は貴族とそのペットになりすまし、監獄へと潜入する。

パンツ・プロジェクト

キャット・クラーク／著 三辺律子／訳 あすなる書房

中学に進学したりブは、制服のスカートにどうしても抵抗感がある。なぜなら外見は女子でも心は男だから。スカートの下にズボンをはいたり、校長先生に服装規定の変更を訴えたりしたが事態は好転しない。おまけに保護者は同性同士で結婚した母親二人と知られて、クラスで孤立してしまう。

そんな中、リヴは数少ない味方であるジェイコブ達と協力して計画を実行する。名付けて「パンツ・プロジェクト」。



わたしがいどんだ戦い 1939年

キンバリー・ブルベイカー・ブラッドリー／作 大作道子／訳 評論社



第二次世界大戦下のロンドン。足の悪いエイダは、母親にさげすまれながらも、ひそかに歩く練習をしていた。子どもは疎開できると聞いたエイダは、弟のジェイミーと田舎行き汽車に乗り込む。

疎開先は、今までの貧しい暮らしとは全く別の世界だった。松葉杖を与えられたエイダは、ポニーに乗ることまでできるようになるが、やがて母が迎えに来てしまう。

15歳、ぬけがら

栗沢まり／著 講談社



親が働かず、給食で命をつないでいる麻美にとって、夏休みはピンチだ。水道を止められ公園で顔を洗ったり、パン屋で食パンの耳をもらったりして何とかしのいでいた。

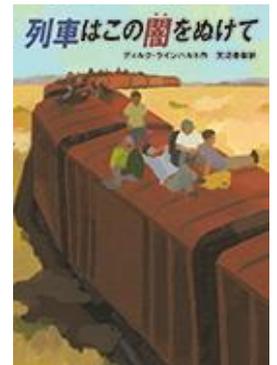
がまんの限界で出会ったのは、NPO が無料でやっている学習塾だった。ほどこしは受けたくなかったが、手作りの温かい昼食はつい食べてしまう。塾代として、講師の唯さんにバレーボールを教えるというのも気に入った。

列車はこの闇をぬけて

ディルク・ラインハルト／作 天沼春樹／訳 徳間書店

南米、グアテマラに住むミゲルは、アメリカに働きに行ったまま帰らない母を探そうと家を出る。難民センターで知り合った 4 人の子どもたちとミゲルは、メキシコを北上する貨物列車に命がけで飛び乗った。

不法乗車を取りしめる警官の目を逃れ、暑さや空腹をやりすごすが、目的地の半分も行かずに山賊が現れる。5 人は全財産を奪われた上、列車から放り出された。



凍てつく海のむこうに

ルータ・セペティス／作 野沢佳織／訳 岩波書店



第二次世界大戦の終わり、東プロイセンにソ連軍が侵攻してきていた。ドイツはバルト海に船を派遣し、領内に住むドイツ人を逃がそうと「ハンニバル作戦」を立てる。

看護婦のヨアーナは、港へ向かう途中で、怪我をした若者フローリアンと道連れになる。フローリアンはナチスの秘密を握って逃走していたのだった。二人はやっとのことで船に乗るが、同じ頃、ソ連軍はひそかに魚雷を準備していた。